

## 合併の経緯 — 野口村 —

## ◇明治の合併前後の野口村

旧御前山村の野口地区は、江戸時代には野口村、大畑（島）村、野口平村、門井村の4村に分かれていました。このうち大畑村は天保13年（1842）に野口村に合併し、その後、野口・野口平・門井の各村は現在は大字となっています。『那珂郡郷土史』によれば、野口村は一説に「野州」（栃木県）の「入口」にあたる意が村名の由来となっていると言われます。また、野口平村は中世に野口村から分離し、村内にあった広大な平地にちなんで「野口平」と名付けられたとされます。門井村はかつては「大井村」であったとされ、その由来は村内にある井戸（現存）であるといわれています。門井村の鎮守鹿島神社もかつては「大井神社」でしたが、元禄4年（1691）2代藩主光圀により鹿島神社に改められ、「大井」の名称を残すものは失われてしまいました。

明治5年（1872）に町村を超えた広域行政区（当初は戸籍区）である大区小区制が施行されると、3村はそろって第11大区1小区に、翌年の改正で第4大区6小区になりました。しかし、統一的な整備が進まず、大区小区制は廃止されました。替わって明治11年に郡区町村編制法が公布されると、小規模町村は連合村の形態をとりました。同年に野口村は三美村外一か村連合に、門井・野口平村は国長村外四か村連合になります。同17年の改正後は3村すべて野口村外四か村連合に属しました。

このような流れの中で明治22年（1889）、市制町村制が公布されました。明治の合併の始まりです。これにより野口村・野口平村・門井村が合併し、新たな野口村が発足しました。役場は野口2084番地（現在の野口地区センター）に置かれました。明治34年からはかつての水戸藩郷校時雍館の建物を改造して使用したとされています（『御前山村郷土誌』）。時雍館は元治元年（1864）、諸生派に与する寺門登一郎が指揮する一隊によって放火されており、このとき残った建物が使用されたのでしょう。明治38年の「野口村事蹟簿」（御前山村役場No22）によれば、当時の役場の住所は当初の場所のままになっており、時雍館建物の一部を役場に移築して使用したものとされます。

戦後、昭和25年には同じ場所に2階建ての庁舎が新築され、更に昭和55年に現在の御前山支所の場所に建てられました。初代村長は、幕末期に野口村庄屋を務めた関沢源次衛門克明の次男長次郎が就任しました。



▲野口村役場跡の現況

## ◇野口村事蹟簿

「事蹟簿」とは明治後半から太平洋戦争期に至るまで毎年村ごとに作成されたもので、村の人口や産物、産業についての記録です。野口村には明治38年から昭和18年までの15冊の事蹟簿があります。明治38年の事蹟簿では「旧蹟」の項に「本村古史二至大ノ関係アル」として蓮覚寺（廃寺）をあげています。蓮覚寺はもともと時雍館が建てられた場所（現常陸大宮市教育支援センター）にありました。佐伯神社の別当寺として空海が開創したという伝承があり、空海が佐伯氏の出身であったことが神社の名の由来となったことを紹介しています。



▲野口村事蹟簿（当館蔵）

## ◇昭和の合併

昭和28年に公布された町村合併促進法により、町村規模の適正化（人口8,000人）を図るため、野口村は翌年6月に町村合併調査会を開催、11月に伊勢畑村との合併協議会を設置し、那珂郡野口村と茨城県郡伊勢畑村との間に第一次の合併が成立、昭和30年2月1日御前山村が誕生しました。この合併により、戸数1,200戸、人口5,400人余の村となりましたが、それでも適正規模には届かず、続いて西に隣接する長倉村との合併案が持ち上がりました。昭和31年4月に合併促進協議会が発足、9月29日に合併が成立し、新たな御前山村が誕生しました。

【参考文献】 塙泉嶺『那珂郡郷土史』宗教新聞社 大正12年、茨城県総務部地方課編『茨城県市町村合併史』昭和33年、『御前山村郷土誌』平成2年